

体験から得られる子どももの力

— 育てる会の教育理念 —

座談会

私たちが育てる会は、1968年の創設以来、青少年を対象としたさまざまな自然・生活体験活動を実践してきました。そしてこれらの活動の一つひとつは、会独自の体験教育理念図（3ページ）に基づいて構築されています。

私たちがめざす子ども像は「喜々として生きる子ども」です。この像を描くには子どもたちにとってどのような「力」が必要なのか、それはどういった体験活動によって獲得されるものなのか、また体験を「群」として捉えどのような活動をプランニングし、指導に当たっていくのか。これはすべての育てる会職員が共有している理念に基づく日々の実践課題でもあります。

今回の座談会では、このような理念に基づき日々実

践に取り組んできた各現場の主任指導員に集まってもらい、子どもたちが喜々として輝く瞬間、それはその後の子どもたちの成長にどのような糧をもたらす期待を持てるのか、語り合ってもらいました。

（代表理事・「育てる」編集長 青木 厚志）

・日時 2022年1月14日（金）

14時～15時50分

開催方式…オンライン

・司会

赤坂 隆宏（あかさか・たかひろ）

八坂美麻学園 統括主任指導員 入職19年

・出席者（五十音順）

稲井 祐介（いない・ゆうすけ）

三瓶こだま学園 主任指導員 入職16年

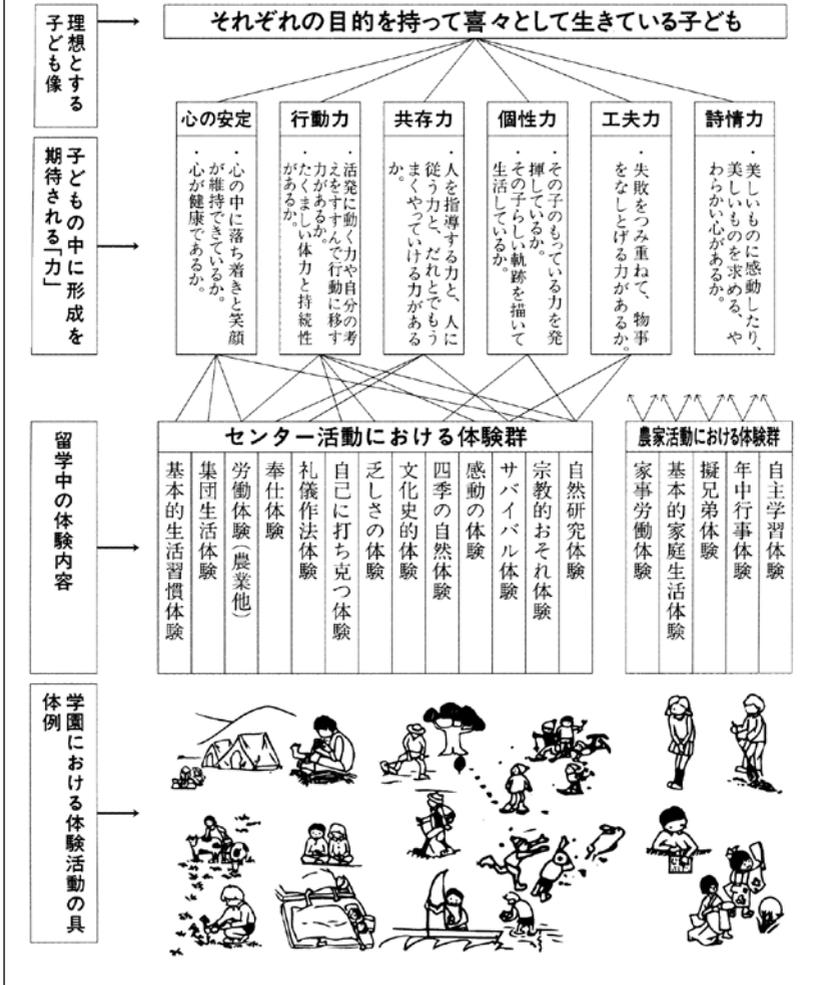
大嶋 しおり（おおしま・しおり）

くらぶち英語村 統括主任指導員 入職9年

戸田 佐和子（とだ・さわこ）

山村留学売木学園 主任指導員 入職27年

育てる会の活動目的と体験内容(1972年立案)



喜々とした子ども達の姿とは

赤坂 それでは今日はこの4名で、育てる会の理念図を眺めながら語り合っています。この理念図では、一番上に「それぞれの目的を持って喜々として生きていく子ども」が掲げられています。



赤坂 隆宏

て、それに向かっていく体験群と、それによって形成される力、一番下には日々の活動が描かれています。私たちの大きなテーマは、そうした子ども像を実現できるように、常にこれを思い描きながら、山村留学や短期行事の活動を組むことなのですが、みなさんは、目の前にいる子どもたちが生き生きとしている、喜々としている、と言うと、どんな場面を思い浮かべますか？ もしかしたら山村留学1年目の子たち、2年目

の子たちの継続年数の違い、あるいは夏や冬休みなどの短期行事参加者によっても変わってくるかもしれませんが、なぜその子どもたちが生き生きしている瞬間にたどり着いているのか、というところも含めて。

稲井 とても難しいテーマで、どういう話をすればよいのかなど考えていたのでありますが……。生き生きとした子どもたちには、当たり前のようにですけど、何か目的を持ってこれがないとか、楽しい



稲井 祐介

などか、そういうものがあるのではないのでしょうか。太鼓を叩く山村留学生の姿も、1年目はまだ恥ずかしいですけれど、周りの様子を見ながら叩いている子が多く、みんなに見てもらえること、表現することの楽

しさを覚えてきて、もっとうまくなりたい、自分を見てほしい、そういう気持ちが出てくることによって、とても力強くなったり、体の使い方が大きくなったりと、輝いて、生き生きしてくる。太鼓で言うところのうところなのかなあと思っています。

赤坂 山村留学生が取り組む太鼓や民舞は、伝統芸能に触れると同時に、表現活動という側面を持っていきますよね。稲井さんが言うように、取り組んでいく中で生き生きとする姿にたどり着く子ども多いと思いますが、そこまでの過程において、私たち指導員はどのような意図を持って指導しているのでしょうか？ 子どもたちはこちら側から投げかける方法など、具体的にはどんなものがありますか？

稲井 一つは成功体験かなと思います。やってみたことよってそれがうまくなる、そういう体験を重ねる一方で、こちらからも褒めるような声掛けをしていくことで気持ちが高まっていくのかな、というのがあります。また、例えばOBORGが来たときの姿を見るこ

とで、かっこいいな、という思いを持つというきっかけもあるでしょうし、OBORGだけじゃなくて、地元の太鼓集団の大人の伝統芸能をやっておられる方々の生の姿やビデオなどを見てその姿に近づいていきたいな、と思ったりすることがきっかけになっていくのかな、とも思います。

赤坂 大嶋さんはいかがですか？

大嶋 子どもが生き生きしているなと感じるのは、一つは、子どもが何か自分が感じたものを共有したいと思ってくれるときで、その多くは自然から得ているように思います。雪が降った日だとか、何か生き物を見つけたとかで心に刺激を感じたときに、指導



大嶋 しおり

員や周りの人たちと共有したいと思つて発信してくれ
る、そういうところに一瞬の生き生きさがあると感じ
ています。だから、仲間とか指導員とか、集団生活の
中で何かを共有する相手ができあがっているこの環境
が生き生きさを生み出している部分もあるかもしれな
いと今ふと感じました。

もうちょつと長期的なものだと、例えば継続生は、
自分の役割をしっかりと与えられている、頼られている
、あるいはこんな集団にしたい、自分はリーダー的
な存在でみんなをまとめたいなど、何かしつかり思い
がある子は、その長期的な生き生きさがあるかなあと
いう気がします。

それと、これは子どもによりますが、逆境に立ち向
かう状況のときにやる気がわいてくる子がいて、例え
ば今年の英語村で言うと、諏訪湖に行く予定だったの
がコロナの関係でキャンプに変更になってしまつて。
それを聞いて「えーっ」と思う子がいる一方で、周り
との関係もあるかもしれないですが、じゃあ自分たち
でどう盛り上げるかとか、何に挑戦するか、みたいな
ところに意識を持つていたり。また台風が来て干し

ていた稲が倒れてしまったときなど、それをマイナ
スにとらえずにモチベーションに変えていく。そんな逆
境に対して生き生きしている感じもあるかなという感
じがしています。

赤坂 いろいろキーワードが出てきましたね。発信、
共有、チャレンジ、乗り越える……。中でも、逆境に
直面して「やってやるぞ」みたいな場面をあえて設定
する部分も、私たちの体験活動の指導の中にはあると
思うのですが、戸田さんはいかがですか？

戸田 私も大嶋さん
が言ってくれた一時
的なこと……子ども
たちが個々に四季の
自然体験や自然研究
体験をして、それを
共有してくれるとき
に生き生きしている
など感じるものが多



戸田 佐和子

いです。

農作業については妥協ができないので、きちんと終わるまで止められないところがありますし、あえて設定する厳しい場面と言えるかもしれません。田んぼや畑の草抜きなどは、子どもにとっては辛いばかりで、もう二度とやりたくないと思っていたかもしれないですが、後から振り返ると思えば出に残っていると言う修園生もいます。ただ一方で、逆境の設定とても難しく、キャンプのときに、使える道具を本当に少なくするとか、それぞれの子があえて厳しい条件を自分で決めて行うこともあるのですが、子どもの力に沿った内容でないとかえって自信を無くしていく子どもも多かったような気がします。

子どもの力を伸ばす場面

赤坂 確かにその点は見極めがとても難しいですよね。海のサバイバル体験をやっている大田（三瓶こだま学園）ではどうですか？

稲井 海の活動は、子どもたちは生き生きしていますね。そもそも海で活動すること自体が楽しいというのもあると思いますけど、獲物を捕る、魚を突く、ということについては特に、「よし捕るぞ」という感じでやっていますね。捕れた分だけ夕食が豪華になる、ということもあるでしょうし、そもそもこう、狩猟採集じゃないですけど、本能的なところもあるのか、意欲的になる子は多いですね。

先ほどの「キャンプで制限をかけて」というところでありましたが、時代なのか、子どもの特性、性格なのか、僕も心が折れちゃう子が増えてきたような気がしています。こちらとしては乗り越えてほしい、今回できなければ次の機会にがんばってほしいと思ってしまう設定をしているのですが、「あ、もうだめ……もう自分できない……」みたいになっちゃう子が増えてきているのかな、という気がしています。昔は山村留学を継続するにしても、「ソロキャンプがうまくいかなかったからそれを絶対なんとかやりきたい」と言う子がいたのですが、ちよつと減ってきているのかな、と。

赤坂 そういう心が折れそうになった子たちに対して、さらに価値を得るための何か、声掛けとか、設定とか、ありますか？

稲井 心が折れてしまいそうな子には、やっぱり成功体験からと思っていて、「できた」という気持ちをつけてあげないといけないのかな、と思っっています。例えば火おこしがうまくいかない子であれば、なぜ火が付かないのかという話をしながら、「どういふふうにやっているの？」とか、「こういうふうに見たらどうか」という話をしたり、本当にどうしようもないときに限つてですが、手を加えることもあります。

赤坂 逆に、そういった状況を乗り越えて、次なる壁に向かつていける子には？

稲井 火おこしに関して言うと、「マッチではもう余裕で付けられるよ」みたいな子は、マッチを使わないで火打石やきりもみ式でやったりとか。よりチャレンジできるような、そういう方向に投げかけをしたこと

はありましたね。

赤坂 なるほど、更なる課題を与えるということですね。稲井さんからはキャンプで乗り越える達成感など具体的な例を出してもらいました。ここで確認ですが、育てる会の理念図には段階がありますよね。それはつまり、①活動で子どもたちが何を体験するか、②その体験が理念図のどの体験群にあてはまるのか、③複数の体験群の中からどれを主体験に位置付けて今回の活動を実施するのか、④それによってどのような力が子どもたちに醸成されるのか、こういった点を指導員は考え、指導案を作成するわけです。もちろん場合によってはこの順序が逆方向になることもあります。

ではここで、子どもたちに醸成される力に注目して、今の子どもたちを見ていて、こういう力が付きにくいのかな、ここをもう少し育ててあげたいな、今の時代だからこそこういう力が必要じゃないかな、と感じていることはありますか？

稲井 活動の話ではないのですが、山村留学生の生活

で集団を作っていくところで、本当はもつとぶつかってほしい、言い合いやケンカをすることでお互いをもつと理解したり関係を強めたりしてほしいな、と思うところはあります。そこがもつとあれば、絆きずなというか団結力が上がって、もつとよい学園を作れるのにな、と思うのですが、それをしない子が多いのかな、なんとなくで関係を作ってしまったているのかな、と。学園の構成や学園生の性格によることもあるかもしれないですが。

赤坂 戸田さんはいかがですか？

戸田 そうですね、もめることはあるけれど、よい集団にしようとか、そういう感じのもめ方ではなくて、ただ自分の気に入らないことだけをぶつけて終わってしまつて残念だな、という場面はありますね。

それと、何力と言うのでしょうか、ずっとコツコツやりに続ける力みたいなもの、例えば畑の草取りのような単純な作業を続けられない人が多い気がしますね。昔からかもしれないし、それこそ子どもによるのかもし

れないけれど、そんなことを思います。

赤坂 草取りで諦めかけた子にはどう指導されていますか？

戸田 指導と言うか、そうですね、声を掛けると同時に、指導員も黙って草を抜き続けているという姿を見せているつもりです。あとは、すぐきれいに一本も残さずに作業をしているような子のところを、周りに聞こえるように褒めるようにしていますけれど。

赤坂 特に農作業での労働体験というのは、収穫を迎えるまでは、自然条件に加え、人間が体を動かして働くという作業が必須で、それを抜きにして簡単には達成感はいわねないこと、それがあつて初めて収穫の喜びがあることを実体験として味わつてほしいという意味合いがありますね。

高崎（くらぶち英語村）はどうですか？ 農家がなくて英語を中心に据えたセンター生活だけとなり、集団生活中ではたいへんなこともたくさんあると思います。

大嶋 うーん、英語村の子たち素晴らしいな、と感心
しかないというか（笑）。留学をしている中で我慢が
たくさんあると思うので、1年いるだけで本当に素晴
らしいと思っっているのですが、あえて言うなら、自分
から自分に対して生み出す厳しさのようなものは、あ
まりないかもしれません。なければいけません。例えは乾
燥機とか、熱中症対策で部屋に付いているエアコンと
か。この時期、朝は本当に寒いですが、私たちとして
はそれも体験してほしいわけです。でも子どもたちは、
そこにあるエアコンを使わない朝を、自分から体験し
ていこうという感じにはなりませんね。もちろんある
ものは使っても構わないんですが……。単純にルール
として「何度になったらエアコンを付けます」となっ
ていれば子どもたちにもスツと入っていくけれど、
「できるだけ我慢する」という投げかけ方だと、割と
こう、快適な環境で暮らしている子どもたちに、自分
の体験の幅を広げようとする意識を生み出していくの
は、難しいようです。

「不」の体験がもたらすもの

赤坂 理念図の中にも、体験群として「乏しさの体験」
など、あえて不便、不足、不満という環境を設定する
ことで、子どもたちが自ら解決しようとしたり、乗り
越えようとしたり、工夫したりという力が生まれ、そ
こから生き生きとした姿につながっていくというのが
ありますね。

今私の手元に、4年間山村留学をしていた女の子が、
修園時に書いた作文があるのですが、その内容が今ま
での話につながるというか、山村留学の本質をよく
語っているなと思ったので、ちょっと紹介したいと思
います。

『私は山村留学に来る前は、ものなどがたくさんあ
ること、満ち足りていることが幸せだと思っていた。
テレビやゲームがあり、やりたいことを好きなだけや
り、友だちと楽しいだけの会話をし、欲しいものが手
に入ること。それらが理想形で、完全な幸せの形だと
思っていた。』と書き出しています。

そんな彼女が山村留学をしてどう感じたかというこ

となんです、最初のうちは軽い気持ちで山村留学に来てしまった自分を呪ったそうです。寂しいし、家に帰りたいし、人間関係もうまくいかない。夏休みに一時帰省したときは、留学に戻るのが嫌で集合時間にも遅れるほどでした。

ところが、そんな彼女に変化が訪れます。山村留学で取り組む民舞の演目である「はねこ」の楽しさに魅了され、夢中になったことがきっかけとなり、初めて努力する楽しさや充実感を知ったと。そしてそれは満ち足りた環境では得ることのできない楽しさだったと語っています。

結局、この子はその後4年間山村留学を継続していくわけですが、『留学中は、苦しいことや逃げたいこともたくさんあったけれど、乗り越えたときの幸せや得られるものが大きいということにも気付かされたし、苦しさを一歩ふんばって耐えることが少しずつできるようになった。』と書いています。そして最後に、『山村留学は不を学ぶ場所。まったくその通りだと思ふ。不足や不満は私にたくさんのものを与え、成長させてくれた。来年は都会の便利さがあふれた生活に戻

るけれど、ここで気付いたことを大切にして進んでいきたい。』と締めくくっています。

確かに彼女は最後、みんなが憧れる存在となり、自信を持って学園を巣立っていく姿がありました。もちろん、彼女も民舞だけではなくて、最後は中3までいたんですが、先ほど大嶋さんが言ったように、継続生や最上級生として役割をこなす中で、それが活力になっていった面も多いとは思いますが。みなさんからも、このような山村留学生の姿や言葉で、印象的なものがあれば聞かせてください。

大嶋 少し違うかもしれないのですが……英語村では毎日外国人スタッフと一緒に生活して、同じような英語を繰り返し使うので、それを子どもたちが獲得していくのは確かです。また一緒にいる時間が長くなるほど、一つひとつ言葉で伝えなくても、考えは伝わるようになっていきます。ただ英語村では、思いや行動を言葉として発信してほしいし、日本語の通じる外国人スタッフと話すときでも、英語で話してほしいと思います。子どもたちもそれは理解しているのだけ

ど、実行するのはとても難しいことのようにです。学期の節目や収穫祭（山村留學生が年1回、自分たちの体験を保護者や地域の方々、学校教職員などに発表する場）のときなどに英語を使って発表する機会があるのですが、そこで発表する楽しさとか、人が発表しているのを見てああいうふうになりたいとか、そういう刺激を得た子たちは、英語を積極的に使い出して成長していきます。でも、中にはやはり、英語を話せるようになりたいという気持ちはあっても、どうしても必要なきにしか話さなくて、自分から自由に話せるようにはならないままで終わってしまう子もいるんですね。そういう子と後々やりとりしていたら『英語が話せる環境、いつでも聞ける環境、わからないときに聞ける環境というのは英語村にしかなかったから、あのとき頑張っておけばよかったと思いが今頑張っています』と言ってくれたことがあります。

だから、山村留学の環境はなかなか得られるものではなく貴重あること、それに気付きここでしかできないことに挑戦していくよう、子どもたちには伝えたいと感じています。

赤坂 そうですね。ただ全員が留学中に何かに気付き、留学中に生き生きした姿を見せてくれるわけでもなく、山村留学で培った見えない力が後々プラスにはたらくっていく子どももいますよね。いつか、この体験があったからこそと思えば、それはそれで山村留学の1年間の体験が生きたということなのだと思います。

生活を通じた自然体験から得るもの

赤坂 さて続いては、何かしらの指導の結果としてだけではなくて、山村留学の環境に身を置いたことで自然発生的に生まれる体験についてはいかがですか？

例えば八坂だと、夏には通学路の帰り道で、中学校の制服を着た女の子たちが自分たちの畑で育ったキュウリを収穫してかじりながら帰ってきて、「おいしいよ、これ、いま畑で取ってきたんだけど、喉乾いてたからめっちゃおいしいよ」という姿。都会ではほぼ見られない光景ですよ。そのときの生き生きした表情が思い浮かぶのですが、そういったことはありませんか？

戸田 そういふのはありますね。2年目以上の子に割り当てた畑でその子が作ったもの、ミニトマトなどですが、それはその子がひとり占めしてもよいのですが、みんなに分けて「おいしいね」と言って一緒に食べたり、ほかの学園でもあると思いますが、晩御飯の食材にしてくださいと言って出したり。

結局、食べることにつながる行動や活動をしているとき、割と生き生きしていると思います。先人の知恵を学べる食文化の体験など、何かを作って最後に食べる活動には、うれしそうに取り組む子が多いですね。畑でできたものに限らず、自然の木の実を食べたときなども、「ここにあるよ」と大人や知っている子が教えた場合は「キモチワルイ」と言って少ししか食べなかったのに、その後自分で別の場所で見つけたときなどは「あそこにこんなあったよ！」と、先ほどの大嶋さんの話にもつながりますが、非常によい表情をして報告してくれたりしますね。川で釣りをして釣れたときや、それをまた捌さばいて食べるときとかもすごく生き生きした表情を見せてくれました。

赤坂 特に食に関することには、子どもたちは食欲であり、目が輝きますよね。自然の中でたくさん体を動かすからこそ、食べる事は子どもたちの活力にいちばん結び付く体験材だとも思います。ほかにどうですか？

大嶋 先日雪が降った日、小学生は1時間ずつと雪合戦しながら学校に行きました。雪玉を投げ合って、避けたときに田んぼに落ちてズボンがびしょびしょになったり、学校にも15分くらい遅刻してしまったり。なかなか来ないから校長先生がみんなどうしたかな、と通学路まで迎えに来てくださったのですが、とても楽しそうに学校に行って、それは山村留学ならではの、という感じがしました。遅刻はまずかったですね（笑）

それと戸田さんがおっしゃった食べ物に関しては、やはりアンテナが高いですね。栗を見つけたから拾う、地域の人のお宅に柿をもらいに行く、あとは何か食べ物がある場所にみんなまで取りに行く、みんなに教える、それを共有する、というのが山村留学ならではの、と思います。

英語村のすぐ隣に川があつて夏に何回か川遊びに行くのですが、飛び込みができる大きい岩に登って飛び込んで、更に「もう一段上にいい?」「俺も行く、俺も行く」と自然発生的に盛り上がってみんな挑戦していく姿も、山村留学だなあと感じます。

コロナの影響で昨年からほとんどん焼きも英語村だけでやっているのですが、大きい火をみんなで囲んで過ごしているときや、なんとなく暖炉の前にみんなが集まってきたりととめない話をしているときなど、仲間といる、一緒にいるから生まれる空気感は山村留学ならではの気がします。修園生たちも、そういった時間や空間を求めて時折センターに帰ってくるのかもしれない。

稲井 そういうことはありますよね。大田でも個人の畑作業をしていたときに「都会の人たちは幸せじゃないよね」と留学生に言われたことがあります。「畑をやるって大変だけれど、都会の人はそれで収穫物が得られたときの喜びも知らないし、スパーに行けば手に入るから、何も考えず、何も感じずにそういうも

のが手に入る。だけど、山村留学生ならそういう苦しさを知り、収穫する喜びを知って手にできる、そういうことができるから自分たちは幸せだよね」ということを言った子がいました。

それと、ちょっと違うかもしれませんが、収穫祭の個人体験発表(留学生一人ひとりがテーマを決めて、体験に基づいた発表をするもの)は、個々に興味関心を持って取り組むことが多いだけに、その時間を確保するために日々の生活がうまく回り出すということがありますね。荷物整理をパパッと片付ける、掃除をさっと済ませるなど、やりたいことがあつて目的があるから生活にもメリハリが出て行動に現れる、そういう子が何人もいました。

一人ひとりの体験に焦点を当てる

赤坂 今挙げてもらった収穫祭の個人体験発表は、子どもたちがそれぞれの興味関心に基づいてテーマを選んで体験を深めているわけですが、その中で個性特性を發揮し熱中していく姿はまさに生き生きとしていま

すね。そういった興味関心の投げかけとして、例えばどの学園でも毎朝の「朝のつどい」で指導員から「自然の話」をしていると思いますが、そのほかに何か取り組みをしていますか？



稲井 年によってやり方を変えたりはしていますが、大田では「朝のつどい」とは別に、何年前から「夜のつどい」ということで、当番の子どもが自分で見つけた自然をみんなに紹介しています。純粹にその日に見つけたものを持ってくる子もいれば、過去に見つけておいたものをストックしておいて発表する子もいたりしますが。

赤坂 とてもよい取り組みですよ。通学路で取ってきたものを「これ朝のつどいで話して」と言って指導員に預けてくる子がいますけれど、確かにお互いのアウトプットによって共有できる場があると、子どもたちの視野も広がってくるでしょうね。

個人体験については、ここ数年はコロナ禍で身近なものに焦点を当てることが多かったかと思うのですが、こんなテーマがありましたよ、みたいなものはありますか？

稲井 大田では、最近よく聞くSDGsに絡めた体験をした子がいました。学校でも個人探究活動といっ

て、SDGsで掲げている目標に関連することを地域の中で探求していくというのがありますが、センターの個人体験発表もSDGsに絡めてやってみたいと。学校でSDGsの話をしてもらった大学の先生を紹介していただいて、個人体験でもその先生に会いに行つて話を聞いたりして。だいぶ熱心に取り組んでいました。その子は昆虫食に目を付けましたね。秋になるとものすごい数のイナゴが発生して、センターの田んぼの活動でも、一歩踏めばイナゴがガーツと飛び交うのですが、その中で虫取り網をガーツと振り回しながら田んぼの畔を走って、それこそ何百匹というイナゴを捕まえて、乾燥させて粉にして食べ物を作るというのをやりました。

赤坂 八坂はちょうど今夜から明日にかけて炭焼きの活動があるのですが、炭焼きというのも、自然のサイクルを利用してエネルギーを再生していくという、昔の人々の知恵が詰まった持続可能なローインパクトの営みだと思えます。世の中の課題に結び付く活動を取り上げ、使命感を持ってそこに参加するということのも、

子どもに活力を与えますね。売木はいかがですか？

戸田 細かく見ていけばSDGsに絡んだものがなくもないですが、昔から子どもたちが興味を持っていたことに落ち着いた気がします。やっぱり、食べることにつながるような個人体験発表をする子が何人かいて、作るとき、食べるときは生き生きしていた印象ですね。

体験を深める地域とのつながり

赤坂 ほかにも個人体験発表の中で、村内調査とか……今コロナ禍で難しいところもありますが、地域を回ってインタビューして歩くというのはやっていますか？

稲井 実はそれが課題でして、「育てる」12月号でも浅平指導員が書いていたのですが、コロナ禍とはいえ情報を得るときにネットを使ってしまっていることが気になっています。もちろん調べてそのままではなく、それを体験して発表してはいるのですが。例えば

漬物などの保存食をテーマにした子が、それこそ農家さんに聞けば間違いないことなのに、ネットで検索してしまったりして。これはとてももったいないと思います。地域……ここにいるからこそ得られる生の情報とかスキルとか、そういうったものを大事にしたいなと思っと思っています。そのため今後はもう一切ネットでは検索しない、自分の足で聞きに行くとか、本で探すとか、そういう風に指導しようかと考えています。

赤坂 そうですね、そこはとても大事なところですよ。地域で話を聞いて回れるような人的環境を作るというのも指導員の大きな役割の一つとしてありますね。地域に根付いて暮らす人たちの知恵や考え、さらには温かさに触れることで、子どもたちが憧れを持ち地域の魅力に関心を持って取り組むことも、喜々とする瞬間ですよ。それぞれの地域にそういった人材がいるかと思うのですが、例えばこういう人材からこういうことを学ぶことができたというものがあれば教えていただけますか？

稲井 個人体験でいうと、例えば今年、木工細工をした子がいまして、結果的には鳥の巣箱を作ったのですが、その子の場合、大田市内にいる宮大工さんとなりができたので、釘を使わないで作るやり方を教えていただいたり、先ほどのSDGsのことについては専門の先生とコンタクトを取って話を聞かせてもらったりとか。ほかにも家を作っている子がいたのですが、その子はその地域に大工さんがおられるので、その方にいろいろ教えてもらいながらやっています。

戸田 売木も毎年郷土料理や保存食などに興味を持つ子がいて、農家さんなど地域の人に教えてもらいに行きました。ただ、村の中でこういうことは誰に聞けばわかる、というのが決まってきたので、指導員が知っている人につなぐ雰囲気になり、毎年同じ人のところに聞きに行くようになってしまっています。ここ数年は、Ｉターンや地域おこし協力隊で村に来た人にも専門的なことを知っている方がいるので、そういう方に話を聞きに行くことも、多くなっています。

赤坂 子どもの興味関心もさまざまなので、私たちが
らすると普通に目の前にあることが子どもによつては
優れた体験材に代わりますよね。また体験する過程で
いろいろなたちとのネットワークが生まれて体験が
深まり、将来設計の基になる、という部分もあるのか
な、と思っています。

というの、数年前に美麻学園でとにかく神社が好
きという子がいて、地域の神主さんについて回って、
作法から何からすべて教わったり、地域の方4人だけ
の小さなお祭りに参加させてもらったりしまして。そ
の子はもう二十歳になるのですが、そのときのつなが
りが現在も続いていて、今はコロナで来ることができ
ませんが、地元に戻ってからも都合を付けて、小さな
集落の祭りに継続して参加している、そんなつながり
も生まれているんですね。

みなさんのところでも修園してからも地域とつな
がっている子どもたちっていますか？ センターと農
家さんとはよくあると思うのですが、それ以外でお世
話になった方など。大田は18年目とのことですが、在

園中にやる地域の神楽などは修園した後もつながって
いますか？

稲井 過去に、個人体験で神楽を取り上げて、地元の
多根神楽団に入って教えてもらい、公演にもついて
行って出させてもらった子がいました。その子は動物
も好きで、そういう関係の勉強ができる高校が大田の
隣の出雲市にあったので、島根に残って勉強しながら
神楽を続けたいと言ってその高校に進みました。ただ、
隣の市から神楽の練習のために大田市の三瓶に通うと
いうのは実際なかなか難しく、結局、神楽は続けら
れませんでした。そういう思いを抱いて島根に残った
子はいましたね。

赤坂 島根の高校に進学したというのは、地域にとつ
てはうれしいことですね。大田は18年目にもなるか
ら、ほかにも地元の子と結婚して戻ってきたとか、就
職で戻ってきたとかもありますか？ そういう元留学
生が地域で活躍しているとか？

稲井 1期生とか、ほんとに初期の頃の留学生が地元の人と結婚したのが2組ありますね。先ほどの神楽団にも入っています。そういう意味では、少ないですがそういう例もあります。

赤坂 大嶋さんはどうですか？ 地域の人材を子どもたちの体験に結び付けていくという面で。高崎でも山村留学を通して地域の人たちとつながり、体験を教えてもらうとか、指導してもらうということがあると思います。

大嶋 コロナでここ2年はあまり地域の方と一緒になつての行事はやっていないのですが、以前だと、どんどん焼きをするときは、地域の人がグラウンドに集まって、太い竹を切り出してきて小屋を作るのですが、そういう作業を手伝っているとき、子どもたちはとても生き生きしていました。地域の方も気合を入れて手伝ってくださるので、見ているだけでも迫力があつて、とても雰囲気があります。

あとは郷土料理の「おきりこみ」を作るときや、こ

んにやく作り、餅つきするときも地域の方に来ていただきました。餅をちぎっていくときの熟練した手つきなどを見ていると、大きな刺激を受けるようですね。教えてもらうとか、食い入るように見るとか、そういう姿があります。

英語村はホームステイがないので、地域の人とのかわりについては意識的に作るようにしています。例えば、「おきりこみ」の活動では、地域の方を呼んでいきなりおきりこみ作りをするのではなく、「おきりこみって何なんだろう」という投げかけをして地域で話を聞いてくる、というところから活動を組みました。子どもたちが班に分かれて、聞いてきた内容を発表し、レシピを作ってみるとか。それぞれ地域のお宅にお邪魔して、お茶を出していたり、そのお宅特有のレシピを引つ張り出して教えてくださったりする様子は、指導員には生み出せない特別なものなのだな、と感じます。

ハロウインのときも、事前にお願しておいて、子どもたちが地域のお宅を回り、お菓子をもらう活動をしました。子どもたちは地域を回ることをとても楽

しんでいました。そういう地域のひととの触れ合いの中で、子どもたちも感じるものがたくさんあるようです。

赤坂 地域に眠っているものに新たな視点で光を当てて掘り起こし、山村留学の体験材にすることによって、地域の人が自分の地域の良さなり強みに気付いき、今度はそれを地域の発信力に変えていく。また、子どもたちがかわった人たちに憧れを持ったり、その姿から多くを学んだりする、これは都市部の子どもたちが多角的な視点を持って暮らす山村留学ならではかもしれませんね。

指導員として心掛けていること

赤坂 さてここまでの話で、山村留学には日々の生活の中から生まれる体験だったり、地域のひとのかかわりや地域を生かした体験材を取り入れた体験があり、それを個々の興味関心に基づいて日々投げかけをし環境を設定していくことが、子どもの生き生きとした姿につながっていると聞いた話をしてきましたが、理念

図の一番上に掲げている「それぞれの目的を持って喜々として生きている子ども」にたどり着くために、総じて指導員としては、日々どんなことをしていくか、というところを稲井さんから願ひできますか？

稲井 入職当時から、育てる会の山村留学は個人体験が核になるということを言われていたこともあって、個人体験をいかに輝かせるか、というところが頭にあります。そのためだけではないですけど、大田は山あり海あり、伝統芸能神楽あり、酪農、漁業もあり、と体験材が豊富なフィールドなので、できるだけ幅広い体験をさせてあげたいなあと思いつながら、一年間の集団での自然体験プログラムを考えています。そして集団でさまざまな活動をする中で、それぞれの子どもが「ああ自分はこれが楽しかったな、挑戦したいな」と思えるものを見つけてくれれば。だから心掛けているのは、そういった活動を子どもたちに提供することですね。また、個人体験について言えば、より深く掘り下げて体験できるような人材、つまりプロの方や専門の方と子どもたちを引き合わせることで「もっとや

りたい、もっとやりたい」と思えるような環境を作ってあげることが僕の使命かなと思っています。

生活面においては集団を作っていくところ、あえて大人が手を入れない、子どもたちだけで何とかさせたいなと思う部分もあるので、あえて見て見ぬ振りというか、自分たちで何とかするまで見ていてということも、指導員の役割だと思います。

大嶋 そうですね、子どもたちには留学生活を生き生きとして過ごしてほしいと思っていますので、それには指導員自身も生き生きとした人であること、その姿を子どもたちに伝えていくことを大切にしたいです。子どもたちに伝えるためや一緒に活動をするから、自分も体験したり学んだりすることはたくさんあるのですが、自分自身の興味から何かを追い求めているか。自然に対すること、挑戦すること、地域からの学びなどに、自分が興味を持ってアンテナを高くしているか、ということですね。

英語村は特に、英語の時間もあるので子どもたちが

自然体験の中でできることは限られています。英語村には外国人スタッフがいて日本の外の世界が見えています。留学生活で体験できないことでも指導員や外国人スタッフの存在を通して、自然や文化、地域や海外など、子どもたちの世界や興味を広げたい。だから、私たちが生き生きと過ごし、楽しんで興味のあることに取り組んでいる姿を子どもたちに見せたり伝えたりする、英語村はそういう空気がある場所であつたらよいなと思っています。

戸田 私も稲井さんがお話しされたのとはほぼ同じことを思っていて、いろいろな体験をさせるところからそれぞれ興味関心が出てくると思います。だから毎年毎年同じ活動をしていくだけではなくて、何か新しい活動をできないか、体験材はないかと探すように日々心掛けています。

大田ほど幅広い活動フィールドはないけれども、売木村の中で廃れていきそうなことや、地域の人の中にも「実はあの人はあんなことにすごく詳しいんだ」ということが新たに分かることもあります。だから、埋

もれさせないように掘り起こしたり、そういう人たちと子どもをつないだりするような役割をしていけたらよいな、と思っています。

それから、集団生活の面についても活動の興味関心についても、子どもたち一人ひとり違うので、それぞれをよく見て、それぞれに合った方法で声掛けして、たくさん手を出さないとできない子にはそうするのですけれど、過保護・過干渉にならないように、ということをや日々心掛けています。

赤坂 みなさん、ありがとうございます。私もみなさんが語ってくれた点に本当に共感します。稲井さんの個人体験を核とすること、大嶋さんの指導員自らが生き生きとしていなければ子どもたちに伝えることはできないこと。私も入職時に「まずは三芸を持って」と言われたことを思い出しました。一芸ではなく三芸持てば、子どもたちの興味関心に対応できる幅が広がり、魅力ある指導員として映ることもあると言われました。

また、戸田さんの一人ひとりの違いを見極める点。

これは非常に難しい面もありますが、学校教育ではない山村留学の現場だからこそ、こういった点は大事ですよね。

いずれにしても、子どもたちにとっては一年一年が勝負で、たった一度しかない4年生だったり5年生だったりするわけです。だからこそ、その時にしかできない体験を大事にしつつ、私たち指導員も環境作りなどやるべきことをしっかりやる必要があると思います。

今後、会の理念に基づいて活動を組み、自然発生的に出てくる日常と子どもたち一人ひとりを見きわめたいという声掛けを大事にしていくこと。さらには地域とのかかわりを密にしながら人材を生かす一方で、私たち指導員自身も山村留学のあり方を子どもたちに示し体現していくこと。これが大事なことです。そうすることで、理想とする子ども像に近づいていくことができます。これからもみなさんそれぞれに初心を忘れず切磋琢磨していきましょう。今日はありがとうございます。